〈イベント〉

文：渡邉朋也
写真：山口情報芸術センター［YCAM］撮影：砂木、瀬尾憲司、渡邉朋也
構成：飯沢未央　PDF 制作：稲田駿平

『文化と生物学』の特集記事から生まれた「夏休みの自由研究」

「夏のヘウレーカ！」における『文化と生物学』

Figure 1. 夏のヘウレーカ！『文化と生物学』展示ブース。（© 瀬尾憲司）

2024 年 12 月から 2025 年 5 月にかけて、山口県山口市にあるアートセンター、山口情報芸術センター（以下、YCAM）において、展覧会「夏のヘウレーカ！」が開催された。この展覧会では、様々な領域で活動する計 8 組の参加プレゼンターが、小中学校で実施されている「夏休みの自由研究」に挑戦し、その成果を発表した。『文化と生物学』編集部は、参加アーティストの 1 組として参加した。約6ヶ月におよんだ展覧会の様子を、本展覧会を企画したYCAMの渡邉朋也氏（ドキュメント・コーディネーター／アーキビスト）がレポートする。

「自由研究」と「現代美術」は親戚の関係？

YCAM は 2003 年の開館以来、「メディアアート」や「現代美術」と呼ばれる領域の芸術に取り組み、多くの作品を制作・発表してきた。こうした活動は、芸術文化に関心を持つ人々からは一定の理解を得ているが、一方でそうではない層からは、縁遠いものとして捉えられている。この展示は、YCAM の取り組んでいる領域を、「夏休みの自由研究」という身近な教育プログラムを通じて読み解くとともに、その根底にある探求や実験の精神に光を当てようというものである。隔たりがありそうな両者だが、その歴史的経緯まで視野を広げるとある共通項が見えてくる。それが 19 世紀末に欧米で勃興した教育的潮流「自由教育運動」である。

子どもの自律的な学びを引き出そうとした自由教育運動は、大正時代に日本に紹介され、さまざまな学校や組織、また探究活動を軸とした先駆的なカリキュラムが生み出され、この中に現在の自由研究の原型にあたるものも存在した。戦時中には一連の運動は下火にはなったが、戦後の民主化の流れで再び注目されるようになり、1947 年に策定された初の学習指導要領で自由研究は教科として盛り込まれるようになった（その後、科目外に位置付けられ現在に至る）。自由教育運動は、教育の分野で世界的に大きな足跡を残したが、それにとどまらず美術の分野でも大きな影響を与えていることにも注目したい。その代表的な例が、アメリカの美術系学校「ブラック・マウンテン・カレッジ」である。この学校は、アメリカにおける自由教育運動をリードした思想家のジョン・デューイの教育論を基本的な理念に据えたもので、バックミンスター・

Figure 2.「夏のヘウレーカ！」エントランス。（©SUNAKI）

フラーや、ジョン・ケージ、ジョセフ・アルバースといった歴史に名を残すクリエイターたちが教鞭をとっていた。そこからロバート・ラウシェンバーグやサイ・トゥオンブリーなど優れたクリエイターたちが輩出され、今日の世界的なアートシーンの形成に大きな影響をもたらしたことで知られている。

このように、自由研究と、メディアアートや現代美術は、はっきりとしたかたちではないものの、自律的な学びを指向した自由教育運動で結びつけることができる。言うなれば、共通の「祖先」を持っているということだ。このことは、両者に共通する特徴を見出させてくれる。探究的な姿勢、そして、それをドライブさせる協働性や越境性である。この展示ではそうした特徴に着目をして企画された。

「キャラ」と「腐敗」をテーマにキャラクターコンペを実施してみる

今回、この展示に参加したプレゼンターは、I?language lab、ガラージュ、SIAF LAB.、SIDE CORE、Farmoon、文化と生物学、山口大学教育学部附属山口中学校技術部、夏休みの自由研究研究会の 8 組である。選定を進めていくうえでの大きな前提条件は、2 つあった。

Figure 3.「文化と生物学」展示ブース（©SUNAKI）

それは

1. 創造や制作に関するコレクティブ（集団）であること
2. 越境的・脱領域的な活動を展開していることである。

『文化と生物学』の場合、編集者やアーティストなどさまざまな職能を持ったひとたちが集まり、「文化」と「生物学」という、結びつかなさそうだけれども、地下水脈のようなもので繋がっていそうな 2 つの領域の境界線を撹拌するような取り組みをオンラインコンテンツづくりを通じて展開している。加えて「ズカンフ〜ザッシ」と銘打ち、図鑑とも雑誌とも付かない謎の形式を標榜している点にも脱領域性が際立っており、写真を多用した視覚的インパクトを持つコンテンツと、学術的な知見と生活的な実践が組み合わさったコンテンツの組み合わせにも大きな魅力がある。彼らが取り組む自由研究はどのようなものになるのだろう？ そうした期待と好奇心から依頼に至った。

Figure 4. 応募用紙は会場で記入し（画面左）、（コン）ポストに投函する。（©SUNAKI）

結果的に『文化と生物学』編集部は「『キャラ』と『腐敗』をテーマにキャラクターコンペを実施してみる」という自由研究に取り組むことになった。これは 2024 年に刊行された『文化と生物学』Vol.02 の特集テーマ「キャラ」と「腐敗」に連動したもので、展示会場に来場した人々か

Figure 5. 集まった「腐敗」なキャラたち。（© 瀬尾憲司）

ら「キャラ」と「腐敗」をテーマにしたキャラクター案を募っていった。そして、集まったキャラクター案を、イラストレーションや生物学などの専門家からなる 5 組の審査員たちが審査をおこない、表彰をおこなう。愛好／嫌悪という軸においては対極にあると思われる「キャラ」と「腐敗」だが、多くの人々が両者を結びつけようとした時に、どのような「化学反応」が生まれ、共通点が浮かび上がってくるのかを集合知的なアプローチで明らかにしようという試みた。

会場には、参考資料として『文化と生物学』Vol.02 の特集が置かれ、またキャラクターを描くためのコーナー、そして応募用紙を投函するための箱、通称「（コン）ポスト」が設置された。YCAM は市立図書館を併設していることもあり、日常的に幅広い年代層の多くの来館者で賑わう。会場がホワイエと呼ばれるオープンなスペースだったこともあってか、多くの案が集まり、最終的には 2024 年 12 月から 2025 年 2 月までの募集期間で、80 案以上が集まった。応募作品はいずれも、画力の高さもさることながら、テーマの趣旨を理解し、キャラと腐敗を結びつけることの困難さに真っ向から挑もうとする姿勢も感じられた。そのためか、2025 年 3 月に開催した審査会では白熱した議論が誘発され、単純なキャラクターとしての親しみやすさについての議論を超えて、「腐敗とは何か」「キャラとは何か」といった思弁的な議論まで潜行していった。結果的に、最優秀賞 1 点を含む、8 案が表彰の対象となり、オリジナルのトロフィーと粗品が制作者に贈られた。トロフィーは、「キャラと腐敗」をモチーフに、デザイナーの好田一生が廃棄物を用いて製作したもので、汚さと美しさが共存する、このコンペらしいものに仕上がっている。

Figure 6.「腐敗する」トロフィー。左から優秀賞、最優秀賞、「とても腐敗しているで賞」のトロフィーとなる。「とても腐敗しているで賞」のトロフィーは腐敗が進んだため崩れてしまい、再度作り直し、このデザインとなった。（写真提供：山口情報芸術センター［YCAM］）

議論の広がりに向けて

参加プレゼンターの大半が直接何かを作る／調べるタイプの自由研究だったのに対して、コンテンツを生み出すプラットフォームを作るタイプの自由研究を手がけていたのは「文化と生物学」編集部だけであり、メディアづくりを手がけている彼らならではだった。教育現場でなされている「調べ学習」は、フィールドワークや文献調査に基づくものが多数を占めるが、今回のようにサーベイを中心に、かつ参加したくなる雰囲気づくりを仕掛けとして導入していた自由研究は珍しく、小中学生ら自由研究当事者にとっても大いにに参考になったようだ。今後は受賞した案が社会に飛び出していくことで、「キャラ」と「腐敗」にまつわる議論がさらに広がっていくだろう。キャラクター的なものが社会の中で果たす役割が増えていく昨今、「キャラ」という言葉が持つ意味や可能性が、「腐敗」という言葉を触媒にして深まり、私たちのコミュニケーションの基盤に据えられていくことには社会的な意義を感じている。まずは LINE スタンプかアクリルスタンドを期待したい。

Figure 7. 審査会はオンラインで行われた。画面右上に映るのは、キャラクターデザイン研究者の小川剛さん（審査員）。

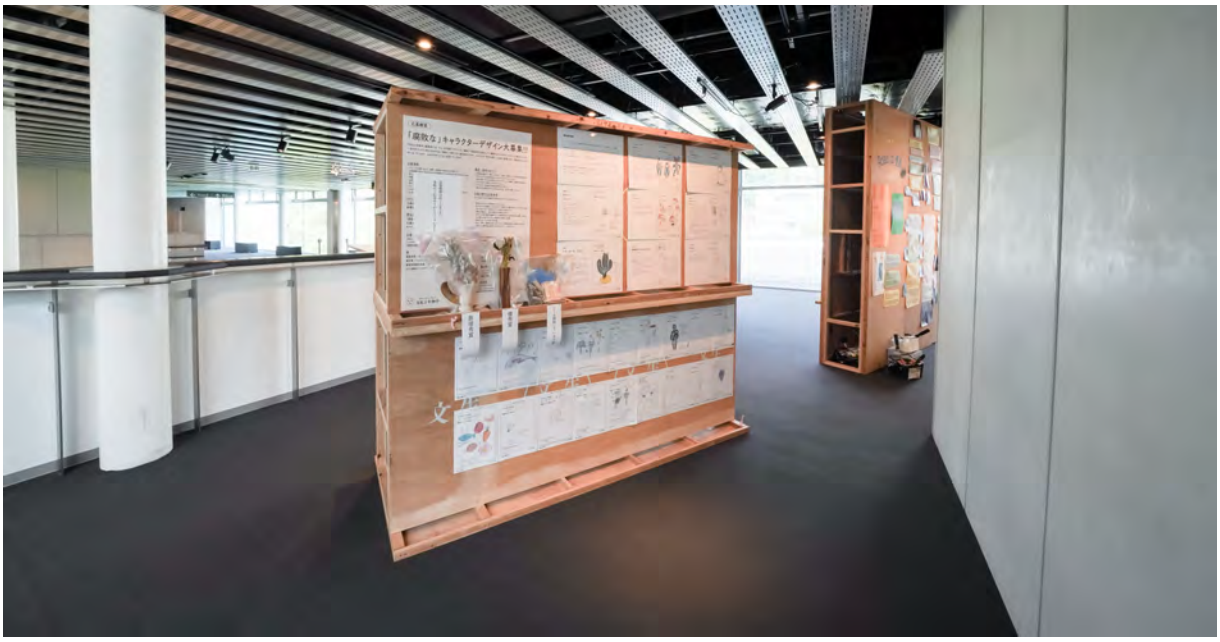

Figure 8. 会期終了間際の展示ブース。審査結果とトロフィーが飾られた。（撮影：渡邉朋也（YCAM）、写真提供：山口情報芸術センター［YCAM］）

応募概要（「腐敗な」キャラクターデザイン公募について）

『文化と生物学』編集部では、Vol.02 特集「キャラ」と「腐敗」の自由研究企画として「腐敗な」キャラクターデザイン公募を行う。一見ネガティブに捉えられがちな「腐敗」の新たな一面を伝えるため、キャラクター制作を通じ、社会に展開する。選ばれたキャラクターは、YCAM・山口市を中心に広く活用することを予定している。

審査員

伊藤隆之（山口情報芸術センター［YCAM］）
小川 剛（京都精華大学マンガ学部キャラクターデザインコース准教授）
福永みつお（グラフィックデザイナー）
柳町みゆき（株式会社ちとせ研究所シニアマネージャー）
『文化と生物学』編集部

審査結果

最優秀賞

るさっく

mimi（広島県）

設定がしっかりしており、影の部分があるのが良い。ビジュアライズと設定の妙が素晴らしいと感じた。（小川）

性格が面倒なところとか、骨がちゃんと残っている点が良い。腐敗の新たな一面を見ることができた。（柳町）

キャラクターにしやすいデザインで、ブラッシュアップのしやすさも評価したい。（福永）

本当にいるかもしれない妖怪のようなイメージがあり、親近感を感じた。（伊藤）

モチーフが多様である。不定形な形だったり、動物のモチーフのキャラが多かった中、両方が組み合わさっている点が面白い。骨があるのも新しい。（文化と生物学 切江）

Figure 9. 最優秀賞となった mimi 氏作の「るさっく」。
満場一致での受賞となった。

優秀賞

クサッタータ・サボン

長嶺えりな（東京都）

負から腐敗の関連がみえる点がストーリーがあって興味深い。（伊藤）

自己犠牲の末の腐敗という物語にとても共感した。（小川）

サボテンが同じ色なのが少し気になる。腐敗している部分との違いがあるといい。人間の営みと腐敗が近いストーリーとなっていることが良い。（柳町）

日本ではなく砂漠にいるサボテンの形だと感じてしまい、少し抵抗を感じた。シンプルで子供にも覚えてもらいやすそう。グッズ展開もしやすそうで、キャラクターとしてのポイントを押さえている。（福永）

サボテンは接木できるが、失敗するとこのような風貌になるので親近感を感じた。また生活感を感じるのもキャラとしての魅力を感じた。（文化と生物学 切江）

Figure 10. キャラの持つストーリー性の高さも評価された、長峯えりな氏作「クサッタータ・サボン」。

とても腐敗しているで賞

カビルー

山本カビル（山口県）

乱暴、凶暴さがビシビシ伝わってくる。3 者ともオリジナリティあり魅力的！ 8 歳という年齢でここまで描いてくれたことが素晴らしい。ただ再現性やグッズ化の難しさは感じる。（小川）

変貌していく 3 体をどうキャラとして表現してくのか難しいと感じた。一体でも良かったのではないか。腐敗のネガティブさより希望を感じるキャラである。（福永）

みんなに愛されるかどうかの視点で見ると、少し怖さと鋭さがある点が気になった。腐敗はじわじわと徐々に変化が起きるものなので、自分の考える腐敗と少しイメージが違うと感じた。（柳町）

腐敗はモノがダメになっていくとイメージが強いが、堆肥を作る時に熱くなったりエネルギーを発している。腐敗の隠れたエネルギーを表している点が優れている。（文化と生物学 切江）

Figure 11. 白熱した議論が展開された、山本カビル氏作の「カビルー」。

『文化と生物学』編集部総評

受賞作品はキャラクターデザインの秀逸さだけでなく、「腐敗」に対する着眼点の新しさ、キャラクターが持つ背景のユニークさを含めて、総合的に審査した。その中で mimi 氏が制作した「るさっく」はキャラクターの愛らしさだけでなく、「腐敗」の新たな一面を感じさせる設定も高く評価され、満場一致の評価で最優秀賞に選ばれた。また長嶺えりな氏が制作した「クサッタータ・サボン」が、僅差ではあるが審査員から高い評価を得て優秀賞となった。こちらもキャラクターデザインが優れているという点だけでなく、作品に添えられた「腐敗」に関するストーリーも共感を呼び、受賞となった。

また審査員推薦作品賞として各審査員から高い評価を得た 5 作品を選出した。最後に、ユニークな解釈で腐敗を表現した作品に贈られる「とても腐敗しているで賞」は山本カビル氏が制作した「カビルー」の受賞となった。「とても腐敗しているで賞」の選考については、審査員が考えるそれぞれの腐敗のイメージや捉え方の違いから白熱した議論が繰り広げられ、慎重に時間をかけて決定に至った。

『文化と生物学』の特集記事から発展した今回の自由研究は、「キャラ」と「腐敗」というテーマの面白さや可能性を、より深く探求する貴重な機会となった。このような場を設けてくださった渡邉朋也氏に、改めて感謝したい。

「夏のヘウレーカ！」概要

2024 年 12 月 13 日（金）〜2025 年 5 月 18 日（日）
山口情報芸術センター［YCAM］ホワイエ、2 階ギャラリー
参加プレゼンター：I?language lab、ガラージュ、SIAF LAB.、SIDE CORE、Farmoon、文化と生物学、山口大学教育学部附属山口中学校技術部、夏休みの自由研究研究会
https://www.ycam.jp/events/2024/heureka/

執筆者プロフィール

渡邉朋也（わたなべ・ともや）
山口情報芸術センター［YCAM］ドキュメント・コーディネーター／アーキビスト
1984 年東京生まれ、山口県在住。2010 年より山口情報芸術センター［YCAM］に勤務。展覧会や公演などのドキュメンテーションや、同館で過去に発表した作品の再制作のプロデュースも手がける。このほか、同館のウェブサイトやガイドブックなどの情報発信のプラットフォームの整備も進めている。著書に「SEIKO MIKAMI―三上晴子 記憶と記録」（2019 年／ NTT 出版／馬定延との共編著）がある。